

<小学校 生活科>

生活科における年間指導計画の工夫

— 地域素材の教材化を通して —

豊見城村立上田小学校教諭 小野寺 清子

目 次

I	テーマ設定理由	11
II	研究の仮説	11
III	研究内容	
1	生活科全体構想図	12
2	地域素材の教材化の必要性	13
3	地域の特性	13
4	地域素材の教材化	13
5	生活実態調査と考察	14
6	年間指導計画の見直しの視点	15
7	年間指導計画の見直しの手順	15
8	月別単元比較	16
IV	指導の実際	
1	単元名 「じまんのムーチャー」	17
2	単元目標	17
3	単元について	17
4	指導観について	17
5	児童の実態	18
6	単元計画	18
7	本時の展開	18
8	ワークシートにみる子供の姿	19
9	児童の変容	19
V	成果と課題	
1	年間指導計画の工夫として	20
2	実践の成果	20
3	今後の課題	20

## I テーマ設定の理由

生活科は子供たちが大変興味を示す科目であり、「今日はどんなことをするの。」と目を輝かせて学習に参加してくる。しかし、実際に体験の場を設定すると「汚れるのは嫌いだからどろ遊びはしない。」「ざりがにをつかむのが怖い。」等、消極的な反応を示すことが多く見られる。これは、室内などの遊びが多く、また塾通いなど、子供たちの生活様態が変化し、彼ら自身が自然と触れ合う機会が少なくなってきたことに起因するものと思われる。このような状況のもとで、子供たちの発達段階に応じ、より多く身の回りの自然に馴れ親しませ、頭だけでの理解ではない、五感を通じた体験をさせることが大変重要であり、またこれが生活科の意義である。

生活科はこれまでの教授中心型の学習から脱却し、自ら考え、判断し行動できる個の育成を求め、子供の側に立った教育を全面に打ち出した総合的な要素をもつ教科である。子供の主体的・積極的な活動・体験を通して身近な社会や自然とのかかわり、自分自身への気づきを通して自立し、自己実現していくことを目指している。つまり、子供たちが自ら対象にかかわり、考え、深め、自信を持ち、学習意欲を喚起をし、心身共にたくましい子に育っていくことを願っているものである。子供たち一人一人に効果的な学習を進めていくためには、子供の興味・関心が何であるか把握しなければならない。また生活科はふるさと学習ともいわれているように子供の生活の場そのものが学習である。だから、地域の特性を生かした教材を精選し学習に結びつけていくために地域教材単元の設定が大切なものになってくる。活動するのは子供であり、子供の発想を大事にし、授業にそれを生かしていくことは、重要なことである。

ところで、これまでの授業実践を振り返ってみると、収穫のずれで単元の配列があわなかったり、子供の願いや思いを活動に生かせなかったり、教師誘導型の授業に陥ったり反省することが多かった。教師は、子供の願いや地域、自然に目を向け、かかわり、素材を教材化したりする創造力や子供の需要に答え得る指導力が要求される。

子供たちが地域の自然・社会に目を向け積極的にかかわり、子供一人一人の豊かな感性や想像力を刺激し、一人一人の思いや願いが生かされ、生き生きとした学習活動が展開できるような特色ある生活科を実践するために年間指導計画の見直しの必要性を痛切に感じた。

以上のことを考慮し、子供の願いや思いが生かされる地域の特性に合った単元設定を工夫し、年間指導計画を授業に生かしていくならば、生活科の授業をより活気のある生き生きとした楽しいものにすることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

## II 研究の仮説

子供一人一人の興味、関心、思いや願いが生かせる地域素材を教材化できる年間指導計画を見直すことによって、自分と身近な社会とのかかわりに関心を高め、自分自身へ気づき、よき生活者としての自立への基礎を養うことができるであろう。

- (6) 人材利用が効果的にできる。  
 (7) 製作、料理は時間を要するので3時間以内にできそうなもの。

上記の条件を考慮して教材の選択眼で推し進めると、教材としての資料価値が生きてくるのではないか。

表1 地域の素材(例)

企業名	(例)琉球漆器	琉球焼とみしろ窯 丸男陶房	(例)与根製塩所	豊見城ウージ染め共同組合	平田豆腐工場
品名	漆器	陶器	ヨネマース	ウージ染め	豆腐
住所	豊見城村字真玉橋149	豊見城村字保米茂1081	豊見城村字与根75-3	豊見城村字伊良波621	豊見城村字高安61
電話	850-7210	850-4489	850-0164	850-8454	850-7517
歴史	漆器が作られた正確な年代は不明。14世紀に中国、日本から入る。中国皇帝、徳川幕府、薩摩藩への進貢物として王府の庇護のもとに芸術へ発展する。	焼物は約300年前にさかのぼる荒焼き(軸葉を使わない)と350年前の上焼き(軸葉使用)のタイプがある。荒焼きの焼成法はタイからラオロン原酒輸入で14世紀にもたらされる。1670年平田典通が中国から赤絵を伝授1682年壺屋が陶器の中心になる。	1694年泉崎村宮城某が薩摩から製塩法を学ぶ。他にも説がある。130年前那覇泊海原の人が与根に奇留して製塩業を始める。与根は南部における主な製塩地であった。1956年代23戸が自家製造、海水利用。1964年2戸に減少。	平成元年村商工会の村おこし事業の募集で仲里さん(織)真境名さん(染)の作品がアイデア商品として取り上げられる。元年、事業展開の試染、2年め試作品作り。3年めウージ染め共同組合を設立	文献では、1183年の奈良春日大社の記録に見える。室町期には豆腐の記事は日記類を中心に急増する。戦前は豆腐作り用の石臼をほとんどの家庭で調度品として備えている。
特徴	ディゴの木 豚の血の下塗り 赤の顔料 漆芸の技法(沈金、蠟趾、蒔絵、堆錦) 堆錦1715年に首里の漆工が羅み出した。漆を塗って餅状にしたもの漆器面に貼りつける	牛骨、豚骨を素材にした「ボーン、チャイナ」を開発コバルトブルーがかるサンゴ焼き(焼く時、回りにサンゴを敷き詰める。)	メキシコ・オーストラリアの原塩(天日塩)輸入平釜製法でろ過された原塩水ににがりを入れて4時間かけて炊き上げる。	草木染め 黄緑、黄色、ウグイス色 年中ウージの葉が取れる。穂が出た後は、染めが弱い。	一晩水に漬けて戻した大豆を生そのままつぶす。天然にがりを使用するので独特な風味がでる。
製作	木の乾燥 → 木地 → 下地 3ヵ月 3ヵ月 1ヵ月 ↓ 作品 ← 塗り ← 加飾 ← 研ぎ 1ヵ月 1ヵ月 漆器の最終工程での加飾体験ができる。	こねる → 形作り → ↓ 作品 ← 焼く 1000℃以上 粘土遊びの感覚で生活用品を作ってみる。	真水を入れる → ろ過 ↓ 食塩 ← 炊き上げ 塩作りを通して生活を見つめ直す。	葉を切る → 煮出し ↓ 作品 ← 煮出し ← 媒染 そめる 生活をより楽しくするための装飾品、必需品を作る。	漬ける → つぶす 冬8時限・夏6時限 ↓ 豆腐 ← 型入れ ← 栄養価の高い食品(大豆)のよさを知り豆腐作りの喜びを味わう。
費用	一人2,500円(割引可)	粘土 1kg 1,500円(2人)	1袋1,300円(25g 天日塩)800g(100円)	1人(120円(綿ローン))	200円(500g)5人分
時間	2時間	2時間	2時間	2時間	2時間
教材化の検討	漆器の全工程は時間がかかるし、費用も高い。教材化の価値は薄い。	図工での粘土遊びの経験を生かし、自由な発想での生活用品が作れる。焼くのは、工場にお願いする。費用が問題。	塩作りは与根のにがりをを使うので興味が深い。塩に関する歴史や食べ物、効能など調べ学習ができる。教材化の価値は高い。	身の回りにある草やウージの葉を使うので興味が深い。専門的な知識の人材利用。染め物は教材化の価値が高い。	大豆から豆腐、豆乳、おからなど多様な学習展開に結びつけられる。教材化の価値は高い。

## 5 生活科実態調査(表2)の考察

2年生の実態調査から「生活科は好きですか。」という項目に8割の子が「はい。」と答えている。好きな理由として「物を作る」ことや「祭りや遊び、探検が楽しい」と回答している子が6割をこしている。生き物の飼育については関心が薄い。子供たちは生活科は体を動かして楽しく遊んだり探検したり製作したりするので大好きなようである。生き物の飼育が栽培に比べ低いのは、生き物は育てにくく、世話がそれぞれ違うので継続観察が難しいからではないかと思われる。しかし、生き物と触れ合うことによって思いやりの心も育ち、死に直面することによって哀れ痛むことが体験でき感動を呼び起こすものだと思う。

学校や家で育てているものでも、全体的に動植物に関心が薄いようで愛着のない結果がでている。「探検したい場所」の項目で学校探検をしたい子が43人もいる。「一年生を案内しよう」で一緒に楽しんで案内していた様子が見られたが、まだ、主体的な活動となっていなかったようだ。子供の探検心が旺盛に継続できるように支援を図りたい。

「雨の日でしたいこと」の項目には室内遊びの方が全体的に多い。雨の日も楽しく自分たちで考えて活動できる主体的な活動の発展につなげなければならない。梅雨の時期になると溝におたまじゃくしやげんごろうなどがが見られるようになるので雨の日の楽しみな探検のひとつにさせたい。

まつりは楽しいまつりが好きで、収穫の時期を心得ている子も多い。まつりの種類も多様で子供の発想がおもしろくでている。地域においてもまつりが盛んに催されているので楽しみ方を知っている。

「バスに乗って行きたいところ」の項目は、デパートなどが45人で「なにを」では、ゲーム、遊びが39人で多く現代っ子ぶりをうかがわせる。夏休みの一人たびが満足のいくようなものになるために自然散策や観察遊び体験ができるように配慮したい。

「どんなおもちゃを作って遊びたいか」という項目では、昔のおもちゃから現代まで子供の発想からおもしろさを表している。製作の過程でも教師が意図的な教材を準備し関心が示されるようにしたい。

「生活科の勉強でもっとしたいこと」の項目では子供たちの願いがいろいろでている。小さな気づき、願いも取り入れられるようにしたい。生活科で子供たちに十分活動させるべきものとしては、動植物の触れ合い、観察栽培を年間を通しておこなうべきではないかと思う。単元の設定が終わると、その学習が終わりではなく始まりにならないと命あるものの不思議さ、おどろきやいくつしむ心が育たないと思う。日々の確かな観察が感動する目、豊かな心を育て低学年の子供たちには特に大切なことである。

## 6 年間指導計画の見直しの視点

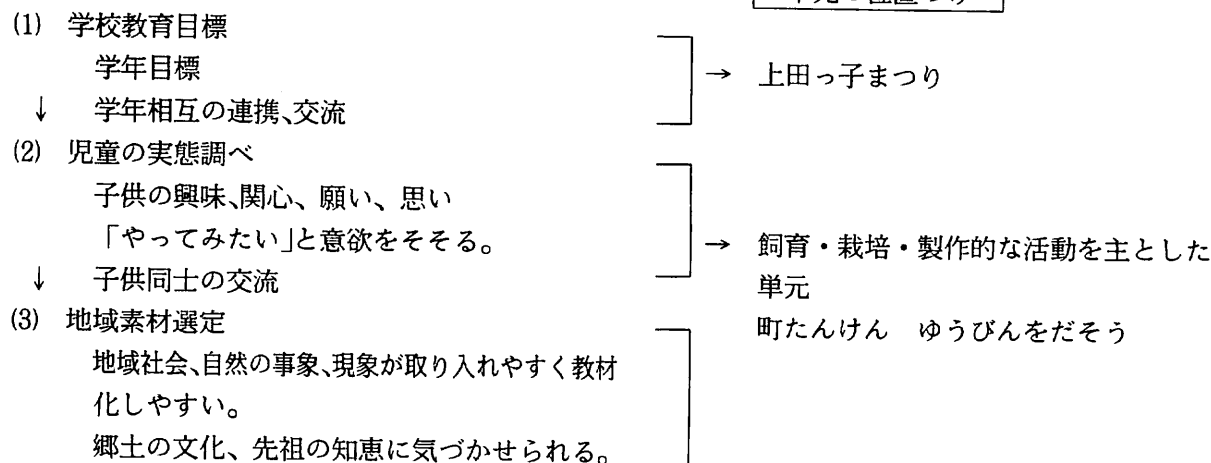
生活科を導入して三年目に入るがこれでいいのかと実践するたびごとに分からないことが多く悩むことが多かった。子供一人一人を見つめ、実態に即して目標に迫った活動をさせることができていたか等、反省点がでてきた。年間計画にそって授業を進めていると、季節がずれてミニトマトの収穫ができなくなったり、どんな野菜を植えてサラダパーティーに使うか、祭りのとらえかた、生き物のとのかかわらせ方、地域教材の取り入れ等、実践しながら問題が山積してきた。それはなぜか、生活科そのものを十分理解しとらえていなかったからである。生活科は、将来においてよき生活者としての基礎、基本作りなのである。そうであれば、自ら人間として生きていくための知恵と働きを身につける学習をしなければならぬ。子供や子供を取り巻く環境そのものが、学習であり、目標である。子供自ら取り巻く環境にかかわり、楽しく体験活動し、体で思考し、問題解決に迫りよき生活者となることである。

そこで、今までの実践と反省のもとに次の視点から年間指導計画の修正をすれば、もっと子供一人一人に 応じた心豊かな活動体験ができるのではないかと考えた。

- (1) 収穫時期は地域の実態にあっているか。
- (2) 地域素材を効果的に利用しているか。
- (3) 子供の実態を調べ、願いや思いを大事にした主体的な学習活動になっているか。
- (4) 幼小、一年生との連携を図っているか。
- (5) 観点別評価計画が盛り込まれているか。
- (6) 単元名の呼び方の工夫はされているか。
- (7) 同一単元のまとめかた。

以上のことを考慮して単元の活動計画に組み入れると、子供一人一人のよさや可能性、を生かすことにつながるのではないかと思う。

## 7 年間指導計画の見直しの手順





[ ①ムーチャー作りと②湯豆腐作りの地域素材を取り入れた理由 ]

- ① ムーチャー作りは沖縄の昔からの伝統行事として受け継がれ親しまれてきたものである。鬼餅の由来を調べると「球陽」という書物には、800年前の舜天王の時代に坂のぼるとなっている。旧暦12月8日に餅を作って食べ、邪気を払い子供の健康を願うとある。昔は、年の数だけムーチャーをひもで結んでつるしていた。そうすることによって子供をいろいろな災いから守ったと言われている。

この素材は沖縄全地域に及ぶが、ムーチャービーサの季節感や子供の健康祈願、鬼退治と関連させると子供の発達段階に即して興味関心をもって活動できるものだと思う。

- ② 豊見城村は県内でも豆腐製造所のもっとも多い村となっている。上田小区域で11軒もありその数の多さにはびっくりする。以前はまだたくさんあったそうだが、現在は後継者不足で廃業せざるをえなくなってきているところもあるとのことである。

豆腐作りが盛んな理由とし①昔から樋川や井戸水が豊富である。②天然のにがりごとれる。③那覇に隣接して市場出荷が容易である。ということが分かった。これらのことから考えると豆腐作りは地域に根差した産業であり、また豆腐は、栄養的にも優れた食品で、今の食生活と大きくかかわっているので子供たちにも身近にとらえさせたい。大豆から枝豆、豆腐作り、きなこ、おから、おからケーキ、節分の豆まきと活動計画が発展的に考えられる。そこで、今回は子供たちに可能な湯豆腐作りを単元に設定した。

#### IV 指導の実際

##### 1 単元名

じまんのムーチャー (7時間・合科的指導2時間…国語・学級活動)

##### 2 単元目標

- ① 周りの自然や人々の冬の暮らしの様子に気づく事ができる。
- ② ムーチャーの行事を体験することによって、その意義を理解しムーチャーのよさを見つけ自分の健康にも関心を持つ。
- ③ 健康安全に気を付けて協力してムーチャー作りを楽しむ。
- ④ ムーチャー作りの準備や片付けが進んでできる。

##### 3 単元について

本単元は第二学年の内容(3)「季節や地域の行事にかかわる活動を行い、四季の変化や……生活を工夫したり楽しくしたりすることができるようにする。」を関連させて設定したものである。

子供たちは、一学期には町たんけんや雨ふりたんけんで地域や自然に積極的に働きかけて探索する目が育ってきている。また二学期は野菜まつりで収穫の喜びを味わって楽しみ、季節のおりなす節目を体験を通して実感している。

昔から人々は季節とかかわりあって生きてきたが、生活の多様化で季節感が薄れ、食べ物や野菜など年中手に入る。また亜熱帯の沖縄では、本土に比べ季節感は乏しい。そこで、ムーチャーとムーチャーの頃にやってくる寒さ(ムーチャービーサ)から四季の変化をとらえさせ、体を通して自然に触れ、地域の行事に込められた願いや工夫に気づくようにさせたい。

##### 4 指導観について

冬を見つけようからムーチャー作りに着目させる。ムーチャー作りは、沖縄の伝統的な行事である。旧暦の12月8日はムーチャーでその時期になると、店頭にはサンニンの葉やもち粉が並べられる。以前は旧暦中心の生活だったが、現在は農作物の収穫との関連から新暦中心に変わってきた。ムーチャーはそのどちらかで行なわれている。

子供たちは、ムーチャーについては、幼稚園や保育園や家で作ったり体験してきた。この単元では、さらに発展させ、子供が課題意識を持って興味、関心から一人一人が自慢できるムーチャー作りをすることを目指させたい。これまでの一律な同じ形のムーチャー作りから自ら主体的に課題を持って作りだす自分に転換したい。またムーチャー作りを通して地域の行事にかかわり、そのよさや込められた願いを膚で



感じとり生活をより豊かに楽しく工夫できるようにしたい。

体験豊かな地域の人材利用を図り子供たちとの生の触れ合いを通して学習への深まりを高めさせい。そのことによって興味、関心、集中度が一層増し、子供の学習効果もより豊かに表れてくると思う。

### 5 児童の実態

子供たちはサラダやふかしいも作りなどをこれまでに第二学年で体験を通してきている。料理して食べることは、子供たちも喜んで意欲的に活動する。包丁や火を使ったりして体験することは危険を伴うが、より以上に話や説明を聞き安全面に注意を払って協力する姿勢が見られた。

事前調査のアンケートの結果から、ムーチャー作りは8割以上の子供達が経験しているがその由来となると知っている人は2割ぐらいである。そのことから、昔の人々のムーチャーに込められた願いや希望が十分理解されていない。「どんなムーチャーを作りたいか」ということに対しては、動物の形や変わった物、赤ムーチャーと多様な意見がでている。それらのことを考慮して子供自身が自らの願いや思いを持ってムーチャー作りに取り組むならば一人一人の思いや願いを生かし豊かな発想や可能性を伸ばし地域の行事に意欲的にかかわりあうのが育ってくると考える。

### 6 単元構成

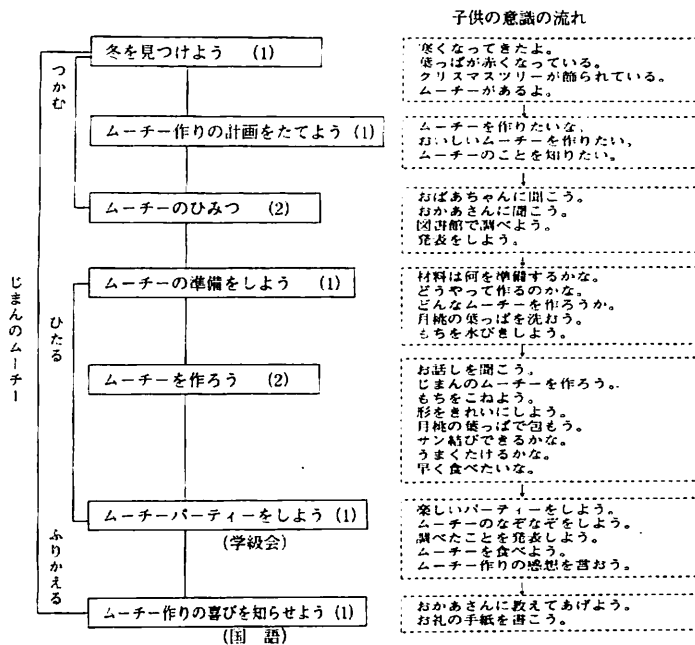


図3 単元構成

### 7 本時の学習 (6.7/7)

#### (1) 目標

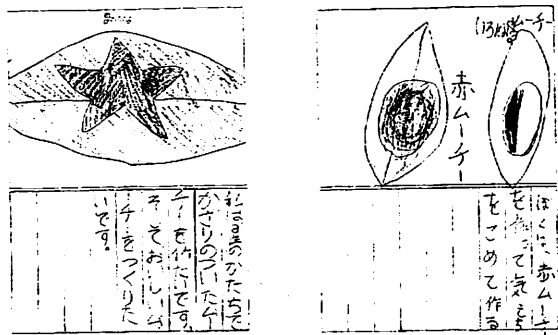
- ・ムーチャーの作り方を理解し工夫して作ることができる。(思考・表現)
- ・地域の人の話に興味や関心をもって聞き、その良さに気づくことができる。(関心・意欲・態度) (気づき)

#### (2) 展開

子供の具体的な活動や体験	環境構成・子供のつづき	教師の支援・留意点	評価
1. 地域の人の話を聞く。 ムーチャーの話 ムーチャーの説明	【設置】 おばさんはどんなお話をしてくれるかな。 ムーチャーを作ったわけがわかったよ。 鬼はこわいものなんだな。	・地域の人の話を聞くことによりムーチャー作り、地域の行事、氏話等に関心をもたせる。 ・人の話を静かに聞く。 ・休み時間に手洗いをしっかりとさせる。(爪、指の間)	・地域の人の話を関心をもって静かに聞くことができる。 ・地域の行事と関心がかわっていることに気づく。(気づき)
2. ムーチャーの作り方を聞く。	【材料・道具】 もち粉・水びきしたもち粉・砂糖・月桃の葉・茹びひも まな板・ボール・おさん・トーナテク・箸し器(2個) コンロ(2個)	・ムーチャーの作り方を提示して説明する。 ・めあてについて確認する。 ・材料に触れながら五感を通しての認識を高める。 ・もち粉をこねるときは、砂糖を入れて混ぜて、その後水を加減させていく。 ・グループの人数分に分けて分けられるように考える。	・ムーチャーの作り方が理解できる。 (思考・表現)
3. ムーチャーを作る。 材料に触れる。 もち粉をこねる。 (教師・代表の子供) こねた生地をグループに分ける。 自分でこねて形を作る。 月桃の葉っぱに包む。 サン結びをする。 箸し器に入れる。	ムーチャーの作り方がどんなかな。 水びきしたのほざざらしている。 こねるのは力がいるんだね。 早くこねてみたい。 ペトペトするよ。 上手に分けようね。  こねるのはおもしろいね。 月桃の葉っぱに包む。 包むのはすこしやりにくいね。 やっとなだ。 サン結びはなかなかだ。  ムーチャーは箸し器で茹べんだね。 ムーチャーが早く食べたいな。  片付けもみんなですよう。	・手のひらで心の鬼を追い払うようにこねさせる。 ・計画的のようにうまくいなくても活動を進めてあげる。 ・箸の裏にやさしくもちを預ませる。 ・サン結びにこだわらない。 ・箸し器にムーチャーを並べて入れるときは片けたように順番させる。 ・声をかけあって片付ける。	・自分で工夫したムーチャーを作ることができる。 (思考・表現)
4. 後片付けをする。	片付けもみんなですよう。		・みんなで作ることに気づく。(気づき)

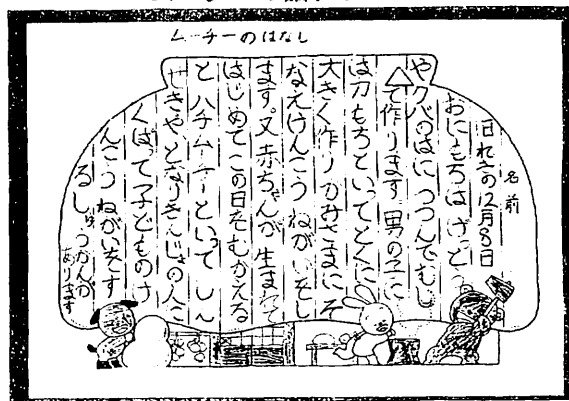
図4 指導案

8 ワークシートにみる子供の姿  
こんなムーチャーつくりたいな



みやら先生ありがとう

ムーチャーの話わかったよ



自分で作ったムーチャーは最高だ!

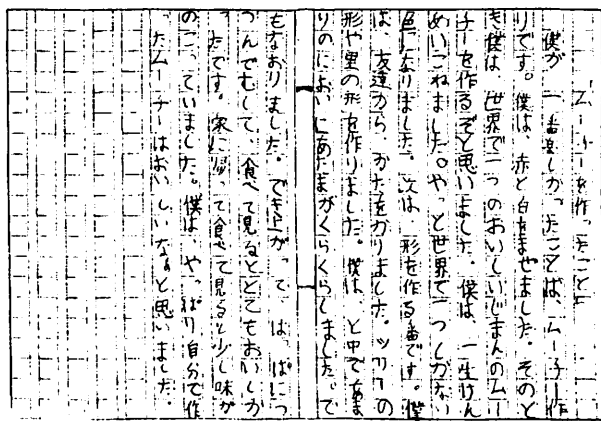


図5 ワークシートにみる子供の姿

9 児童の変容 (実践をおえて)

子供が五感を使って体で活動するとその時ならではの感情の発露が見られる。その言葉の輝き、鋭い観察力に子供の内に秘めた創造力豊かな感性を感じる。体験したことはすなわち子供にとっては学習であり生き生きとした表現をし、どの子供も自分を見つめて書いている。

次に子供の反応、気づき、喜び、等を紹介する。

- ・ムーチャーをこねるところがムニムニして楽しかった。
- ・はっぱを曲げるときぱりぱりと音がしました。私は失敗したかと思いました。でも大丈夫だったので安心しました。
- ・できないと思ったが、ウサギの形がきれいにできてうれしかったです。
- ・こねたとき、ぼくは不思議に思いました。なぜこんなに柔らかいかと考えました。
- ・赤ムーチャーは形がきれいにできました。白ムーチャーはやりにくかったです。「やっとできた。」と嬉しくなりました。

A男の変容

「どんなムーチャーを作るか。」計画を立てる段階においても、何を具体的に自分は作るかで迷い「団子を作る。」と決めるのにも大変時間がかかった。授業をすすめる中で変化が見られてきた。始めは自分から進んで活動しようという態度はみられなかったが、段々、友達のする活動にひかれ、また教師の励ましに石うすを回したり材料のはっぱの準備をしたりと変わってきた。ムーチャーを作る頃には、顔、団子、赤ムーチャーを作り、飾りを入れたり形の工夫が見られ、没頭して活動していった。子供の感想から「三つ作って一つは、学校で食べました。そしたら、おいしかったです。始めて料理に成功しました。とってもうれしかったです。こんどは、10cmのムーチャーを作りたいです。また、1mのものを作りたいです。」などと次時の活動への意欲をみせていた。



## V 成果と課題

### 1 年間指導計画の工夫として

- (1) 年間計画の作成に当たって、実態調査を実施し子供の願いや思いを大事にした。
- (2) 前年度の年間計画を振り返り単元の時期、他の教科とも関連させた。
- (3) 幼小連携、学年のつながりをもたせた。
- (4) 地域の有効な人材の利用と素材の教材化を考えた。

この結果として次の成果と課題があげられる。

### 2 実践の成果

- (1) 子供の実態を把握することは、一人一人の子供たちの興味、関心やこれまでの経験、思いや願いが見えて単元の設定をより具体化することができた。
- (2) 子供の意識の流れを大事にした学習活動の計画は、活動への興味、関心が深まり成就感を味わい、今後の発展学習へと結びついた。
- (3) 地域行事を素材化することによって、季節の違い、季節と行事の結びつき等、ふるさと再発見し、視野も広がっていった。
- (4) 人材活用は、触れ合いを通して温かい交流の場もてた。子供の情意面を豊かに育て感謝する心遣いも出てきた。学習活動形態の変化で、子供が生き生き活動した。
- (5) 年間指導計画に地域素材を取り入れることは、子供に生活の場をさらに深く見つめさせ、発展的な活動を呼び起こし、生涯学習に結びつく手立てと、基礎を養う素地になった。

### 3 今後の課題

- (1) 生活科の年間指導計画は、改善点、工夫の箇所を含めて低学年で連携を深めた話し合いをする必要がある。そうすることによって幼小連携のつながり生活科の目標にせまる教材や素材の使い方、方法も見えてくる。
- (2) 子供の興味、関心は時によって変わってくるので、単元の弾力的運営ができるように展開方法、指導計画実践事例を考えておく。
- (3) 生活科は教材を作り出す発想が常に豊かでなければならない。子供の目の高さで体を通して丸ごと体験できる教材発掘に努め、生活科のねらいにそい、子供の実態にあった特色ある指導計画作りに努める。
- (4) 地域の人材確保は重要なのでその道に精通した熟練者、技術者、専門家などを効果的に活用し、学習の活性化を図り、成就感をもたせたい。
- (5) 子供たちが伸び伸びと活動できる広場、季節感が分かる樹木、水辺の学習ができる池など学習環境施設の充実なども必要である。

以上のようにまだまだ課題が山積しているので、今後はここでの研究を生かしながら研鑽していきたい。

### <主な参考文献>

小西克美	『「生活科」で社会科はどうかかわるか』	明治図書	1988年
文部省	『指導計画の作成と学習指導』	大蔵省印刷局	1990年
沖縄広報センター	『今・ふるさとを語ろう』	沖縄県総務部地方課	1991年
中野重人編著	『生活科指導事例集』	第一法規	1981年
文部省	『新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造』	沖縄県総務部地方課	1993年
嶋野道弘	『生活科情報事典』	ぎょうせい	1993年
豊見城村教育委員会	『豊見城村の教育』	(協)丸正印刷	1993年
豊見城村役所	『豊見城村史』	(協)丸正印刷	1993年